

川についてへi

齋藤礼旺

むかえる箸の手つきで

陰影が照らすのは

男たちの喉笛ばかり

捨てるために仕舞いこむ

苗字や肩書きがあるとして

娼婦のささやき声に

運ばれてくる麦酒は

どうも胡散くさく目の前を

上書きしてしまつてかなわない、

川だ

敗戦がよぎる、というのは

紛れもない建前であつて

この頃の私は

川の支流に幼い喉を向け

隣街かそのまた先にそびえる

尖塔を審美するのに夢中だった。

無数の脆弱に足をとられつつ、

それが身体か藻のしわざか

娼婦というものを未だ知らなかったから

水面だか鏡面だかに顔をざんぶと浸し

漂流したセピヤの瓶へ関心に移せば

後は時系列に済んだことだった